



Title	「北大版ピア・サポート」創生へのチャレンジを：全学教育フレッシュマンセミナー「学生支援におけるピア・サポートを考える」授業実践から
Author(s)	松田, 康子
Description	8.「北大版ピア・サポート」創生へのチャレンジを：全学教育フレッシュマンセミナー「学生支援におけるピア・サポートを考える」授業実践から
Relation	北海道大学ピア・サポート活動報告書（平成22年度版）pp97-110
Issue Date	2011-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45772
Type	report
File Information	Matsuda.pdf



8. 「北大版ピア・サポート」創生へのチャレンジを

全学教育フレッシュマンセミナー

「学生支援におけるピア・サポートを考える」授業実践から

8. 「北大版ピア・サポート」創生へのチャレンジを

全学教育フレッシュマンセミナー

「学生支援におけるピア・サポートを考える」授業実践から

松田 康子¹

8. 1. 授業実践にいたる問題意識

「北大版ピア・サポート」に出会う前、私にとっての「ピア peer」は、精神障害者回復者の方々と構成されている当事者組織であった。

「すみれ会」の面々である。

彼ら彼女らとの出会いは、私が臨床家としての教育を受け始めたころに遡る。学生の頃であったが、月に一度の例会に参加させていただき、ラムしゃぶを平らげたあとの片付けに加わっていたとき、彼ら彼女らの片付けの流儀があることを教えられた。大げさな言い方かもしれないが、余計な手出しが誇りに障ることを教えられた。彼ら彼女らは「ひとりぼっちの精神障害者をなくそう」と、自らの力で「あずましい場所」をつくり、働く場をつくり、生きやすい暮らしやすい社会を作るための運動を日々積み重ねている。「当事者から学ぶ」は恩師からたたき込まれたことである。彼ら彼女らは今でも私にとってよき臨床のスーパーバイザーである。

「北大版ピア・サポート」の立ち上げに参加しはじめたとき、私はこの自身における原点との齟齬を感じ、とまどっていた。声を先に挙げ先導しているのは、学生支援を担う教職員であったし、「学生のための学生による」「学生目線で」という言葉は、本物のピア・サポートを見て育ってきた私にとっては、中身はこれからという進行に、しょうがないにしても、後ろめたさや学生に対する申し訳なさを感じずにはいられなかった。

自身がピア・サポート企画に主体的に参画する際のスタンスを見いだすことができないことによる揺れでもあった。先行してピア・サポートを展開している大学への視察（広島大学）からも、研修において講師から得た情報からも、たいがい、その立ち上げ時において先導する教員が存在していた。それは心得ていてもなお、私は教員としてどのように機能すれば良いのだろうか、自問自答を繰り返していた。

そのような時期に、日本学生支援機構が開催する平成 21 年度全国学生指導研修会に参加させていただき、パネルディスカッション「学生支援の相乗効果を考える：学生参画の意義」で愛媛大学の ELS と法政大学の HoseiSPS 実践を知った。

パネルディスカッションでは、愛媛大 ELS に関わる学生と法政大学 SPS に関わる学生が報告者として登壇し、担当教職員と肩を並べて堂々と生き生きと心に残るいい発表をしていた。仕立てられたような成功談ではなく、イベント企画の実施プロセスにおいて生じた学生間のいざこざにどう向き合ってきたかについて話す学生の姿が、なにより印象に残っている。

¹ 北海道大学 教育学研究院 准教授

この学生たちの姿が、大きな一つの契機であった。

メイヤロフ（1993／1971）は「ケアの本質」で、ケアの原点は応答性であると述べている。であるならば、「北大版ピア・サポート」の中身を作っていく際にも、まずサービスの受け手である学生の支援ニーズをつかむことなくしては始まらない。そしてその支援ニーズへの応答の中身を学生とともに考えることこそが、「ピア・サポート」の出発点であるに違いない。なんだ、これなら私にもできる。幸い私は1年生の演習形式の授業を任されていた。これを活かさない手はない、と思い立ったわけである。立ち上げ当初感じていた齟齬が解消した瞬間でもあった。

8. 2. 授業の構想

授業の最終目標は学生の支援ニーズを学生自らが知り、ピア・サポーターとしての応答を学生自身が考え、提案ができることにおいた。

枠組みとしては、演習形式で定員 23 名。主な履修者は1年生。全学部学生が履修可能な一般教育演習という科目である。開講は後期。入学して半年が経ったばかりの学生が主な履修者である。先のことはわからないけれど、入学したばかりの時期の学生生活については、最も記憶に新しく生々しく想起可能な学生たちが集まることが想定される構造である。ただ目標に到達するためにはまず、学内の学生サポート資源を知っていないことには始まらず、サポート資源を知る機会はまだ少ないことが予想された。そのための準備も授業計画に組み入れてシラバスを作成した（図1）。

8. 3. 授業の展開

8. 3. 1. 初回オリエンテーション

初回オリエンテーションは、定員を若干上回る学生が集まった。私からのオリエンテーションとピア・サポーター代表岡本氏からピア・サポート室の紹介を行なった。また代表以外のピア・サポーター有志も3名参加した。

担当教員の松田が説明していたときの教室は、初対面の緊張した雰囲気が漂っていたが、ピア・サポーター代表岡本氏にバトンを渡したとたんに、ほわっと空気が和んだのが印象的であった。オリエンテーション時に用いた資料の一部を図2に示す。

8. 3. 2. ブレーンストーミングから聴きとり調査へ

学生支援ニーズにかかる想像力を柔軟に、伸びやかな発想をもとめて2回目の授業ではブレーンストーミングをグループで行なった。この時も、ピア・サポーター有志が各グループに1名入り自身のニーズの掘り起こしや想像力の活性化に一役買っていた。思いつくままにあれこれ挙げた支援ニーズは、一つずつ付箋に記入してもらったうえで、第2段階の作業として、対応しているだろうと思われる学内サポート資源（聴きとり調査対象フィールド）に貼り付ける作業を行なった。一例を図3に示す。

聴きとり調査は、保健センター、キャリアセンター、教務課、アカデミックサポート室、MANAVI、学生相談室、何でも相談室、学生支援課の8カ所を設定した。調査

協力の内諾は、事前に担当教員が行なったが、調査協力依頼文書を作成し、実際に連絡を取り調査日を決定し聴きとりを実施するまでは、グループ単位で履修学生が行なえるように指導をした。

履修学生が、学内の学生サポート資源全体を知ることが聴きとり調査の目的であっ

北海道大学シラバス					
■ 科目名[英文名] Course Title					
一般教育演習(フレッシュマンセミナー) Freshman Seminar					
■ 講義題目 Subtitle					
学生支援におけるピアサポートを考える(論文指導)					
■ 責任教員[ローマ字表記](所属) Instructor(Institution)					
松田 康子[Yasuko MATSUDA](教育学研究院)					
■ 担当教員[ローマ字表記](所属) Other Instructors(Institution)					
松田 康子[Yasuko MATSUDA](教育学研究院)					
■ 科目種別 Course Type	全学教育科目(一般教育演習)			■ 他学部履修等の可否 Open To Other Faculties / Schools	----
■ 開講年度 Year	2010	■ 開講学期 Semester	2学期	■ 時間割番号 Course Number	001034
■ 授業形態 Type of Class	演習	■ 単位数 Number of Credits	2	■ 対象年次 Year of Eligible Students	1~
■ 対象学科・クラス Eligible Department/Class	基礎1-52組			■ 補足事項 Other Information	

■ キーワード検索 Key Words

学生支援 ピアサポート サポート資源 調査法の習得 伝える力

■ 授業の目標 Course Objectives

近年、日本の大学は、教授や研究といった教員中心の大学から学生を中心とした大学へのシフトチェンジが求められる時代を迎えています。北大も例外ではありません。本学もまた、学生生活の充実を目指し、学生支援において様々なサービスが提供されていると思います。また、専門家、職員によるサービスに加えて、“先輩が後輩の相談にのる”といったピアサポートも学生支援の一つとして注目され、本学も2009年度からピアサポート活動を開始しています。ピアpeer、とは仲間同士といった意味で、ピアサポートとはいわば、仲間、学生同士の支え合いを示す活動です。当事者だからわかること、できることがあるというのは、ケアや支援の場においても同様のことがいえます。本セミナーでは、支援の受け手としての当事者でもある学生の皆さんとともに、未来に向けて学生支援とリわけ、初年次のサポートはいかに展開すべきか、調査を通して提案することを目指しています。

■ 到達目標 Course Goals

1. 調査法の習得
2. 記述統計の習得
3. 調査報告書の作成
4. 支援ニーズ調査
4. ピアサポートの可能性を見出す
5. 学内サポート資源を知る

■ 授業計画 Course Schedule

1. ピアサポートについて紹介、講義(1-2回目:本学ピアサポーターにも協力を要請するつもりです)
2. 学生支援に望むことについて意見交換(3回目:ペアを組んで行います)
3. 学生支援にかかわる学内サポート資源調査(4-8回目:グループ分かれて活動します。資料を収集したり、実際に出向いて聴き取り調査をしたりして、計画し実行し発表をし、個人レポートをまとめます。)
4. 1年生を対象とした学生支援ニーズ調査(9-13回目:グループに分かれて、初年次学生の支援ニーズ調査を計画・実施します。)
5. 支援ニーズ調査をまとめ、ピアサポートに期待されることについて提案する。(14-15回目:グループ発表を行い、個人レポートを作成し提出します)

■ 準備学習(予習・復習)等の内容と分量 Homework

調査を計画し実行しますので、授業時間外においても構想を練る時間は必要ですし、調査の実施は相手のいる活動ですから、時間外に作業をすることもあるかと思いますが、実際の課題はグループ活動が中心になります。セミナー内の発表もグループ単位で行いますが、レポートは個人課題です。端的にまとめることを求めますので、多くの分量を書くことはありません。

■ 成績評価の基準と方法 Grading System

出席状況を含む学習態度30%、グループ作業への参加度30%、レポート内容(2本提出を求めます)40%

■ テキスト・教科書 Textbooks

図 1 シラバス

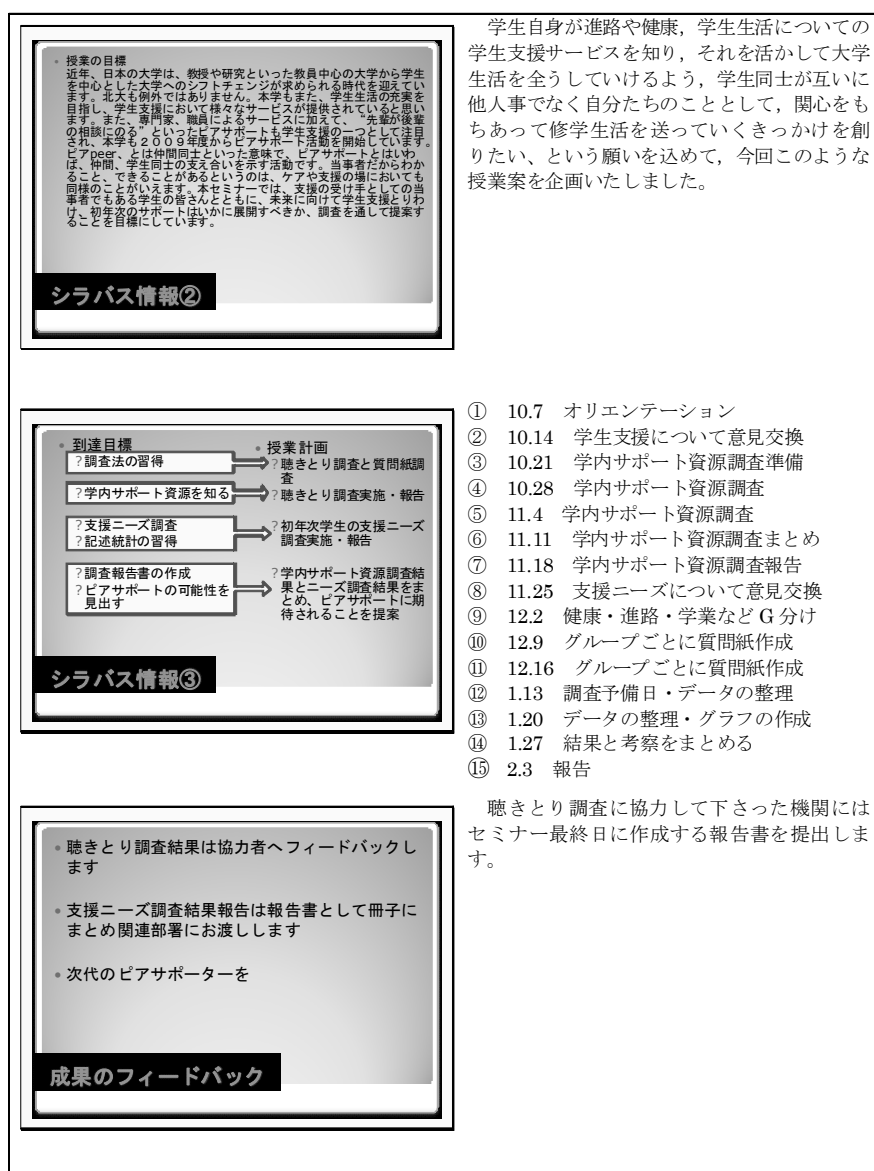


図 2 オリエンテーション資料抜粋

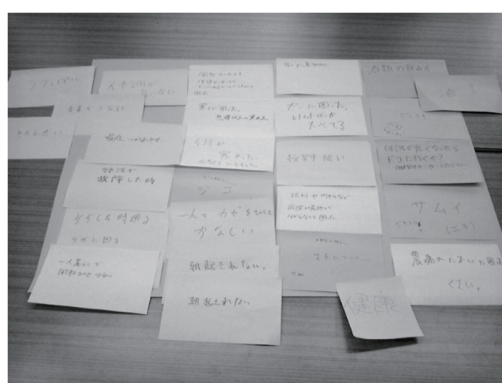


図 3 ブレーンストーミング例

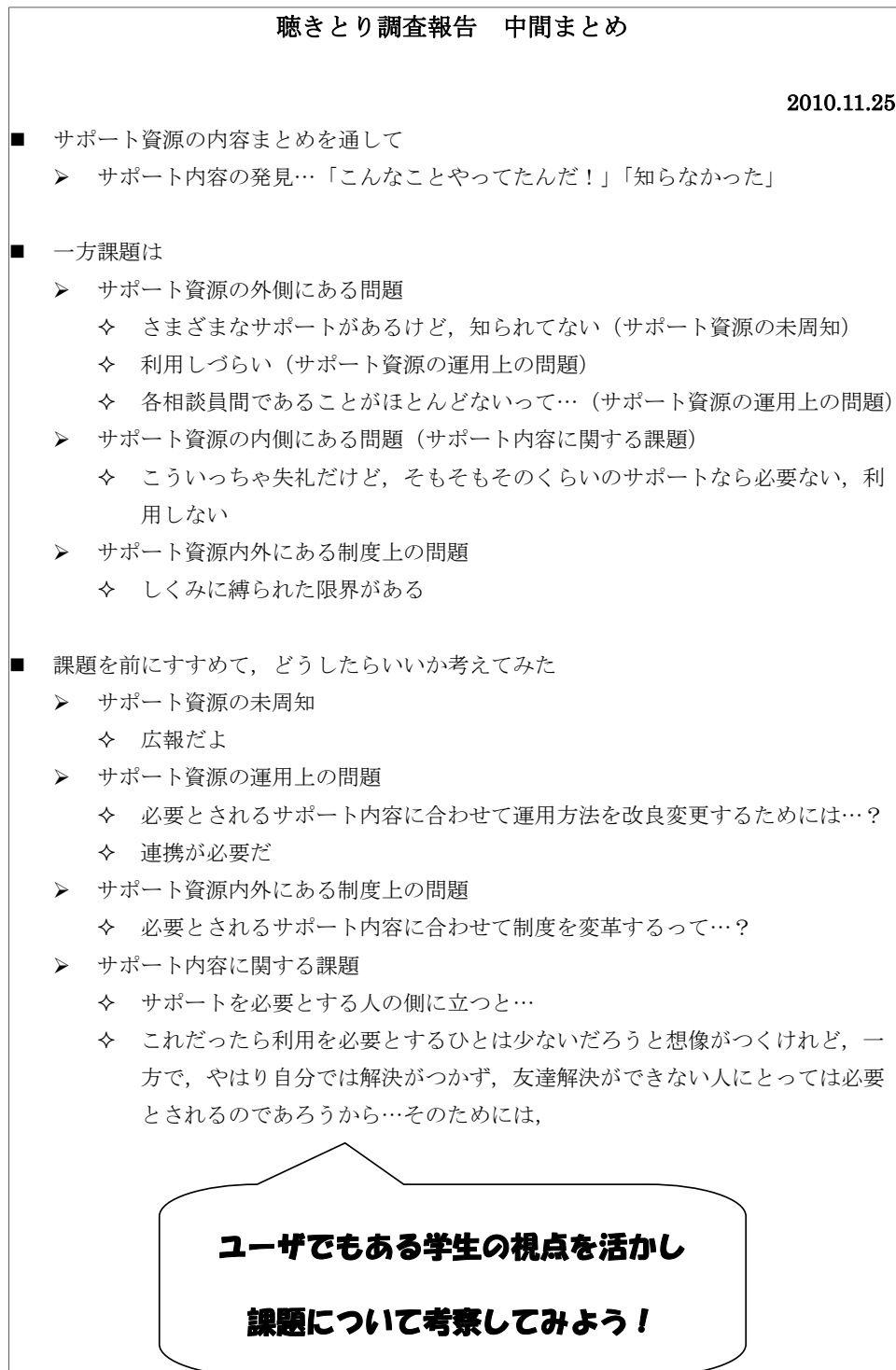


図 4 調査報告のまとめとコメントに関する資料の一部

だが、有志で参加していたピア・サポーターにとっても、私にとっても、この調査結果はあらためて学内資源を知る機会となった。調査の詳細は別の機会に譲ることとするが、授業で配布した、調査報告のまとめとコメント資料を図 4 に記す。

聴きとり調査を通して、履修学生たちはこれだけ多くの学生サポート資源が北大内

にはあるのに、知らなかったこと、知られていないであろう事、十分に利用されていない資源があることに、気づいていった。これはねらい通りであった。しかし、履修学生が行なった聴きとり調査報告を聴いていた私までが、「あらためて知る」というより、この期に及んで「今まで知らなかった」情報がまだまだあったことに気づかされた。10年を越える教員生活と学生相談歴があるにも関わらず、情報の更新が追いついていなかったのである。

この気づきは「北大版ピア・サポート」が担う機能を探る大きなヒントになった。これは、一緒に参加していた有志のピア・サポーターもまた同様ではなかったかと思う。

そこで、次に予定していた学生支援ニーズ調査に入るまえに、調査全体の設計と、調査の最終目的について説明をするために、図5の資料を渡して、履修学生に説明を行なった。図6は、別の機会にアイデアを記したときの手元メモである。

2. サポート資源調査報告に対するコメント

- 「つなぐ」ということがキーワード
 - サポート資源内のまたは、間を「つなぐ」
 - 利用者とサポート資源を「つなぐ」
- 「つなぐ」にちなんで、⇒ ソーシャルキャピタル (SC)
 - ソーシャルキャピタルとは、
 - ◇ 信頼
 - ◇ 参加のネットワーク
 - ◇ 互惠性
 社会の結束力。コミュニティを結束させる潤滑油、持続可能なコミュニティの構築や地域発展のツール
 - そもそもは、Putnam 著(2000)「孤独なボウリング」にて記された概念
 - ソーシャルキャピタルの研究例

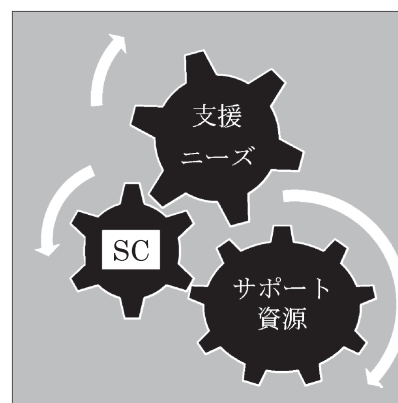


図5 質問紙調査へつなぐ説明資料の一部

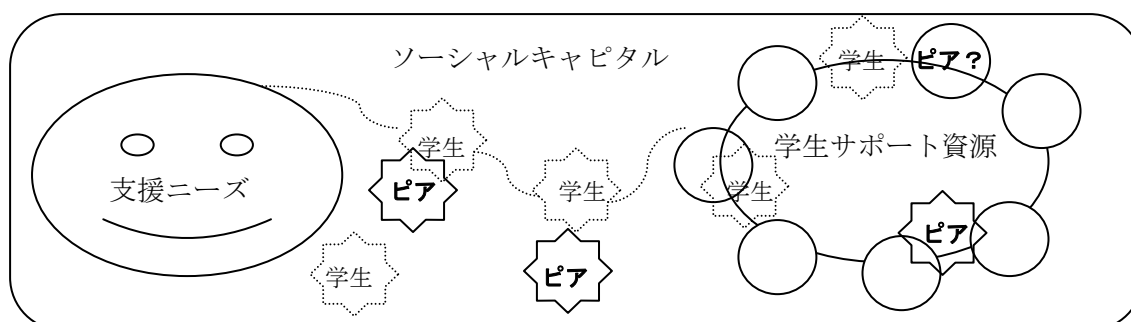


図6 手元メモ

図 6 は、支援ニーズがあって、それに応える学生サポート資源がくまなく用意されればそれですべてうまくいくかということ、そうではないのかもしれない、ということを示すための説明図である。仮説として、うまくいかない状況の中で、支援ニーズとサポート資源を「つなぐ」媒介者、サポート資源内もしくはサポート資源の間を「つなぐ」媒介者、境界横断の媒介者としてピア・サポーターが機能するのではないかと、言うことを述べた。ピア・サポートの機能は、ソーシャルキャピタルを豊かにする役割をもつ、という仮説を投げかけてみたわけである。

授業の目標は、聴きとり調査によって明らかになった学生サポート資源と、次に取り組む学生支援ニーズの把握をもとに、その全体を俯瞰して、よりよい学生支援を展開していく際に、ピア・サポートの必要性の有無や役割機能を考えてもらうことなのだ、と伝えた。

8. 3. 3. 学生支援ニーズ調査へ

学内サポート資源の概要をつかんだ上で、次に着手したのが学生の支援ニーズ調査である。学生支援ニーズ調査にかかる質問紙調査を実施するにあたっては、参考となる資料を3種類手渡し、質問紙の構成をあらかじめ示して作業を進めることとした。以下、図 7 が学生に示した学生支援ニーズ調査報告の構成である。

調査結果の詳細は、調査報告書へ掲載することとし、ここでは、最終的に履修学生が導き出したピア・サポートの役割機能について記す。履修者全員のレポート記述内容をコード化し分析したものを以下に紹介する。

記述内容の引用については斜体文字で示し、下位のコードは〈〉で、同様の下位コードをまとめた上位のコードは《》で示す。

《同じ対等な学生であることの強みを生かす》

ピア・サポートの強みについて、半数弱が同じ学生同士であるということを挙げている。具体的には、

〈共感を得やすい人々が支援を行なうことの意義がある〉

ピア・サポートが他のサポートと大きく異なるのは、あくまで“同じ立場や環境にいる人が行なう支援である”という点である。

〈どんな内容でも話せる気軽さ〉

- どこに相談して良いかわからないとき、あるいはどこに相談しても解決しなかったとき。こんな時にピア・サポートは、学生の不安を少しでもぬぐうことのできる敷居の低い機関として存在すべきである。
- 「学生のピア・サポーターに、どんな内容の事でも話せる」といったピアサポートの魅力をもっと全面的に伝えたい。
- 気軽に利用できる場所として
- ピア・サポート室をより開放的にし、

といったことが、挙げられていた。

質問紙調査報告の構成

1. 調査目的

- ① 1年生の修学上抱える支援ニーズの把握
- ② 学内学生サポート資源の周知と利用、必要性の実態把握

2. 調査方法

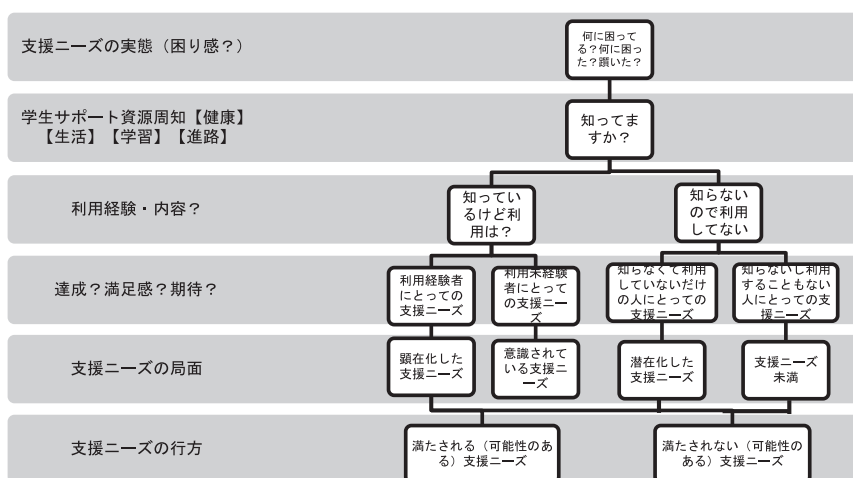
- ① 調査対象…北海道大学に所属する1年生
- ② 調査票

「とつても北大生 2010」

「国公立 4 大学 IR ネットワーク 「一年生調査 2009 年度」調査報告」

「学生生活実態調査 2006」を参考に調査票を作成した。

調査票の構造については以下を参照。



③ 手続き

有意抽出法による縁故法を用いた。調査班各自が身近にいる1年生を対象に調査票を配布し、回収した。

④ 調査期間

2011年1月 6日～20日

3. 結果

① 調査概要

回収部数、有効回答部数

性別

所属学部

居住地

② 回答内容結果

設問に従って・・・図や表をいれて説明しましょう。

4. 考察

- ① 修学上抱える支援ニーズについて（支援ニーズの局面・行方を参考に）

- ② 学内の学生サポート資源をより豊かにするためにピアサポートはいかに機能すべきか、提案を。

図 7 質問紙調査報告の構成

しかし、アンケートの結果、9割の学生が相談相手がいる、と答えていたデータから、『「学生に相談できる」ことはあまりセールス・ポイントにならない』のではないかと、という指摘もあった。

そこで他の役割機能としてあげられていた提案について以下に示す。

「相談」以外の機能として多かったのは、つながりを創り出す機能を強調したものが、具体的には3つ挙げられていた。

一つは、《総合案内機能をもつ》というもので、〈総合案内誌の作成と配布〉や〈相談機関のフローチャートのようなものをつくる（YES／NO で応えていき最終的にどこかの相談機関にたどりつけるようなもの）〉という提案があった。

また、《横につながるコミュニケーションの場を創る》という提案では、サポートというよりもコミュニケーションの場としても機能することや、サポート者と被サポート者の場としてだけでなく、横のつながりをつくる場をめざす、ことが記され、〈学生参加型のイベント開催〉が提起されていた。

なにより一番多かったのは、《ハブ空港的機能をもつ》という提案であった。

〈パイプ役になる〉、〈紹介役に徹する〉、〈案内役を担う〉、〈適切なサポート機関への斡旋〉、〈仲介役になる〉、〈一カ所目の相談機関としての役割を〉、〈資源を利用してもらうきっかけを作る〉、などさまざまな言葉によって、ハブ空港的機能について表現がされていた。そして、そのためにも、学内の資源についてピア・サポーターは精通していることが求められるだろうと記述されていた。

同時に、学生のサポート資源に対する信頼を得る働きも、ハブ空港的機能を持つ場合には求められることが指摘されていた。つまり、ピア・サポーターがさまざまなサポート資源となっている職員とのつながりと信頼を保つことができているという前提がそこには求められている、と解釈できるだろう。

さらに踏み込んだ提案としては、《学生の感想や要望をサポート資源・教員に伝えること》によって、サポート資源をより学生のニーズに沿ったものへと変えていくことや、教員や担任にも案内役を担わせるためにも、《十分な情報提供を教職員にすること》が提起されていた。

ピア・サポーターから職員、教員へ働きかけるベクトルの必要性が示されていたわけである。

上記のようなピア・サポートに対する期待を含んだ提案がされていた中で、一人鋭い指摘をした履修学生がいた。それは、いろいろ期待することにはあるにせよ、現実的に、《利用する学生にとって、そのようなことがピア・サポート室に期待されているわけではない》のではないかと、という指摘であった。たとえば、ピア・サポート室からアカデミックサポートにつながることは予想できないのでは？ということである。解決策としてさらに「ピア・サポート室に行けば、解決法を教えてくれる」という口コミが学生間で広がれば・・・と記述されていたものもあった。

そこで浮上するのが、《認知度 UP》提案である。〈身近に感じてもらうための工夫をする〉ために、親しみやすい雰囲気をつくったり、クラスガイダンスを活用したり、〈イベントを企画して〉様子を伝えたり、〈「ピア・サポート室ではどんなことが解決できるのか」という認知を広げる〉ために活動事例・解決の事例を広報の際に使ったり、という具体案が出されていた。

サポート資源の多くは「受動的」機関であるのに対して、ピア・サポート室は《能動的な機関になれる唯一の存在かもしれない》という、積極的な意見もあった。以下にその記述を引用する。

- 一定の枠にとらわれず動きやすい能動的な機関となることのできる学生サポート資源は、学生や院生などから構成されるピア・サポートしか考えられないのではないだろうか。
- サポート資源には、ある程度の受動性が必要とされるのではないのでしょうか。・・・
(中略)・・・学生との間に、ある程度の距離を設けることが避けられない場合もあると思います。その矛盾点や距離感の問題を解決するのが、ピア・サポートの存在ではないのでしょうか。ピア・サポートは、ニーズを抱える学生側に立ち、サポート資源につながりという存在であるため、前述したような矛盾や問題を引き起こさずに、積極的なアプローチをかけていける唯一の存在だと考えられます。

具体的なアプローチとしては、教室がわかっていなさそうな学生には〈こちらから話しかけて教えてあげ〉たり、入学シーズンには〈簡易ピア・サポートコーナーを学生支援課近くに増設〉するとか、〈勉強会イベント開催〉とか、例えば〈キャリアセンター職員ピアサポ室出張案〉、〈インターンシップ経験者、大学院生交流会・昼食会を開催〉する、というアイデアが記されていた。

《ピア・サポート室への今後の期待》として、〈学生支援の中心になって〉という励ましもあれば、〈他大学との連携や交流の橋渡し〉へ発展させる意見、ネットコミュニケーションへの安易な移譲に対して〈生身の人間が向き合って解決する場の大切さ〉を述べているものもあった。ピア・サポートの紹介に、〈“相談”という言葉を使用しない方がいいのではないかな〉、という貴重な意見もあり、そもそも学生は〈人として自立して行くことが大切であることを伝えていくこと〉が必要だとまとめられているレポートもあった。

以上がレポート内容のまとめである。

8. 4. 授業の自己評価

授業運営については反省することばかりである。

資料を読み込むことや、データ分析について、各局面においてグループワークを活かした協働作業の活性化は十分に展開できなかった。場を設定するだけで精一杯であった。そもそも、授業内容が盛りだくさん過ぎたと言える。本授業をピア・サポート活動にも活かせるようにするには、学生同士が積極的に参加し、さらに今回有志で入っていたピア・サポーターに効果的な役割を担ってもらうことが必要である。そのためにも、授業に入るピア・サポーターの役割を TA として明確にし、学生参加を促す方法として活かす必要があるだろう。

本年度参加した融資のピア・サポーターは、全くの無給で役割も不明確なままであった。それでも参加し続けて下さった数名のピア・サポーターにはこころより感謝の意を表したい。

8. 5. 考察

8. 5. 1. 授業としての取り組み

ピア・サポートと授業における取り組みをつなぐ発想には、2方向の流れがある。一つは、ピア・サポーターの初期研修としての位置づけのものであり、もう一つは、ピア・サポート活動の発展において、正課教育へピア・サポーターが提案する形で取り組まれる場合である。前者の初期研修としての位置づけでは、たとえば広島大学ピアサポートルームにおけるサポーター養成セミナー講義が単位化された例などがあげられる(松田 2009)。

また、愛媛大学における授業の取り組みも前者に属するが、それはかなり意図的な目的のもとに行なわれている。ELS ゼミナールでは、教員による講義の他、自己分析や他者分析、プレゼンテーションや会議の進め方から、セミナー開催に至る内容が盛り込まれている。専門教育と教養教育、そして学生支援活動を横断的に組み合わせた「学生が出会う経験総体」としての学びがねらいであると紹介されており、実にユニークな取り組みと捉えられる。この ELS ゼミの発表内容や指導、振り返りをふまえた報告書が「学生リーダーズ読本」として発行され、毎年改訂されているというのも特徴である(秦 2010)。

次に、後者の例は、HoseiPSC の実践にみることができる。HoseiPSC の「ピア・サポート」を実現するプロジェクトのなかの、「キャンパスライフ向上領域」における「課外教養プログラムプロジェクト」がそれである(土屋 2010)。これは、正課教育を補完する「課外教養プログラム」の企画・運営を担うプロジェクトなのだそうだが、「大学生なら知っておきたい基礎教養講座」では、数学や心理学といった科目が、学生提案のプログラムとして実施されたとのことである。HoseiPSC の特徴は、支援を受けた学生が支援する側に転化する「PSC サイクル」と名付けられた循環型コミュニティの創出が、各プロジェクトの共通目的であるがゆえに、このような発案と実施も可能になったと考えられる。

ピア・サポートとの関連で今回のフレッシュマンセミナーの取り組みを検討すると、先行する実践との大きな違いは、当初のピア・サポート構想の中に組み込まれた授業では一切無いことがまず挙げられるだろう。そういう意味で授業の位置づけとしてはどちらにも属さぬものである。ピア・サポート室立ち上げに関わった教員が、勝手に立案したというのが、実のところである(一応、学生相談室長にはシラバス提出直前に相談はしたが)。

しかし、いざ実行するさいには、さまざまな学内組織職員、教職員の協力無しにはまったくもって進めることができなかった。そして、何より履修学生たちの議論が、「北大版ピア・サポート室」を象っていく際に大いに刺激となった。つまり本授業は発展途上の「北大版ピア・サポート」を、調査を通して多方面の教職員に協力いただきながら、現実に触れながら利用者自らが検討し構想するという点に大きな特徴が見いだせるのだろう。

ここから導き出される本授業の意味は、常に利用者の目線で、学生の目線で、当事者の目線で自己点検評価し成長し続けるピア・サポート活動を脇から支えるという点

にあるのかもしれない。支えられる立場にもある学生が、支える立場にもなる循環が、ここで生みだせれば良いのかもしれない。

授業で実施した調査報告書は授業の成果産物として重要である。今年度も報告書を発行する予定だが、愛媛大学の「学生リーダーズ読本」ほどには洗練されないだろう。報告書をどういう意図のもとに洗練させていくかも、いまだ不確定である。しかし今後は、より目的を明確に形づくっていく必要がでてくるだろう。先に導いた授業の意味に基づいて再検討したい。これは履修学生に対する教員としての当然の務めとして、来年度実行したい。

8. 5. 2. 「北大版ピア・サポート」への示唆

授業において学生目線で検討されたピア・サポートへの提言を、今度は、ピア・サポート室に関わる教員として、どう受けとめ、活かすかについて考察を行う。最終レポート内容分析結果を表にまとめ、さらに左側に共通する機能と提案として見出され

表 1 レポート内容のコードまとめ

機能	上位コード	下位コード
相談	同じ対等な学生であることの強みを生かす	共感を得やすい人々が支援を行なうことの意義がある どんな内容でも話せる気軽さ
	「学生に相談できる」ことはあまりセールス・ポイントにならない	
つながりを創り出す機能	総合案内機能をもつ	総合案内誌の作成と配布 相談機関のフローチャートのようなものをつくる
	横につながるコミュニケーションの場を創る	学生参加型のイベント開催
	ハブ空港的機能をもつ	パイプ役になる
		紹介役に徹する
		案内役を担う
		適切なサポート機関への斡旋
	学生の感想や要望をサポート資源・教員に伝えること	仲介役になる
		一カ所目の相談機関としての役割を 資源を利用してもらうきっかけを作る
能動的機能をもつ	十分な情報提供を教職員にすること	
		利用する学生にとって、ピア・サポート室につながり創出は期待されているか？
能動的機能をもつ	能動的な機関になれる唯一の存在かもしれない	こちらから話しかけて教えてあげる
		簡易ピア・サポートコーナーを学生支援課近くに増設
		勉強会イベント開催
		キャリアセンター職員ピアサポ室出張案
		インターンシップ経験者、大学院生交流会・昼食会を開催
提案		
認知を拡げる	認知度UP	身近に感じてもらうための工夫をする
		イベントを企画して 「ピア・サポート室ではどんなことが解決できるのか」という認知を広げる
期待と課題	ピア・サポート室への今後の期待	学生支援の中心になって
		他大学との連携や交流の橋渡し
		生身の人間が向き合って解決する場の大切さ
		“相談”という言葉を使用しない方がいいのではないかと 人として自立して行くことが大切であることを伝えていくこと

たコードを表1に表した。分析結果、機能は【相談】、【つながりを創り出す】、【能動的機能をもつ】の3つが挙げられた。

先行実践を検討していくと、ピア・サポート活動は活動内容によって大きく2つに分けられる。表1で示した、【相談】と【つながりを創り出す】の二つである。

【相談】という活動で括られるピア・サポートは、学習サポートであったり（名古屋工業大学「先輩のいる学習室」（山下 2010））留学生のサポート（お茶の水女子大学（加賀美 2010））、学生生活面の、またはメンタル面のサポートだったりしている（広島大学ピア・サポート・ルーム（内野 2003））。いずれも学生の強みを活かし、専門の「ちょっと手前」のサポートというものがここに含まれている。

【相談】活動であるがゆえに、サポートする立場とサポートされる立場の関係構造と境界がやや固定的であるところが前提になっていると捉えられる。

もう一方の活動は「ネットワーク創出型」という活動で括られるピア・サポートである。先にみた愛媛大学 ELS や法政大学 HoseiPSC の実践がこれにあたる。

愛媛大学リーダーズ・スクール（ELS）は、第一の目的に「学生リーダーならびに将来リーダーになり得る学生が在学中に出会う様々な課題の解決を支援することで、十分にリーダーシップを発揮し、人間的成長を促進することである」と掲げている。学生同士のクリティカルな関係構築が互いの成長に必要であることを体験させ、さらに他大学の学生支援も視野に入れた学生リーダーズ・ネットワーク構築を掲げている（秦 2010）。法政大学 HoseiPSC では、正課教育、正課外教育に次ぐ「第三のコミュニティ」としての役割を担うと紹介されている（土屋 2010）。

「支援を受けた学生が支援する側に転化する」サイクル（法政大学）、「お互いの成長のために必要な仲間」としての「クリティカル・フレンド」（愛媛大学）はどちらも、サポートする立場とサポートされる立場の関係構造や境界の変化・転置を前提にしているといえる。ここが「相談」活動を行なうピア・サポート活動との大きな相違点である。

履修学生のレポートに記述されていた提案は、二つの活動内容、両者の指針が網羅されていたといえるだろう。これらを受けとめながら、北大ピア・サポートは、何をこれから創生していったらよいのだろうか。「北大版ピア・サポート」の行方について、次に考察を進めてみたい。

ここで一人の研究者・実践者を紹介したい。場づくり師を名乗り始めた日置である（日置 2010）。

日置は、2000 年に NPO 法人「地域生活支援ネットワークサロン」を立ち上げ、釧路の地域福祉を豊かにする仕事を長年担ってきている実践家である。日置自身は自らの活動を「社会福祉」ではなく、「社会実践」と称している。また、肩書を当初は「地域コーディネーター」としていたが、最近「地域づくりは場づくりに他ならない」と述べ、「場づくり師」と名乗ろうとしている。「場づくり師」が働きかける対象は「場」であり、「すべてのアクターが場の担い手となる可能性を保障する」と述べている。日置氏が事務局を務めている北海道釧路のコミュニティハウス冬月荘では、障害者や高齢者、生活保護受給者らが互いに互いを支え合いながら、生活し働く場として機能している。さらに、「場づくり師」は「当事者になること」を追求する」と述べ、生活

当事者として、「自分らしくあること」だと言い換えられている。

「北大版ピア・サポート」の活動は、ひとことで表現するとしたら、どうなるだろうか。

「縁づくり」、「ちょこっとおせっかい」などと浮かぶがなかなかしっくりくることばには出会えない。本報告を見ると、現在代表をしている岡本氏は「つながり創出型」と命名しているようだ。

ここは、教員としては早合点してしまわぬよう、枠にはめ込まぬよう、邪魔をせぬよう、言葉が先行しすぎぬよう、とにもかくにもピア・サポーターとともに、考えていきたい。そして本授業が、その命名の確認や、または再考を迫るものとして、常に刺激を与え続けるものとして機能すればと考えている。

愛媛大学 ELS の取り組みが始まる以前から、佐藤（2005）は学生支援の可能性としてピアエデュケーションの可能性を論じている。スチューデントキャンパスボランティア制度（学生たちによる草の根の学生支援活動を大学が全学的に支援する取り組み）の実践展開のなかで述べられているピアエデュケーションとは、「学生相互間での教えと学びの相互作用により、教え手と学び手の双方がより良く学べる教育手法である」と紹介している。「相談」活動を展開しているピア・サポート活動においても同様に、支援の担い手であるピア・サポーター自身が成長してゆくという報告がされている（内野 2003、杉村ら 2006）。障害学生を支援する学生に関しても同様の報告がある（鳥山 2010）。これは、ピア・サポートにかかわる教職員もまたしかりである。

教職員の業務の補完としてのみピア・サポートを位置づけるのではなく、ともに学びあい成長しあい、元気になれるネットワーク創出機能を持ったピア・サポートの効果は、学生間に留まらぬ大学全体に及ぶ好循環を生む。それを今、私は授業を通して実感している。

【引用文献】

加賀美常美代（2010）お茶の水女子大学ピアサポート体制の事例紹介 大学と学生 第 87 号 22-18

秦 敬治（2010）学生支援の新たな試み 大学と学生 第 87 号 44-48

日置真世（2010） 社会実践による変革の力とそれを支える人間の可能性への信頼
北海道大学教育学研究院紀要 111 号 98-106

松田康子（2009）広島大学ピア・サポアート室訪問メモ

M. メイヤロフ（1993/1971）ケアの本質 ゆみる出版

杉村和美・小倉正義ら（2006）ペア相談と学生の主体性を取り入れた大学でのピア・サポート活動 青年心理学研究 18 51-62

鳥山由子（2010）日本学生支援機構 主催平成 22 年度障害学生修学支援教職員研修会 講義資料

URL:http://www.jasso.go.jp/gakusei_plan/documents/koen2shiryo_toriyama.pdf

土屋貴之（2010）ピア・サポートの可能性 大学と学生 第 87 号 29-35

内野悌司（2003）広島大学ピア・サポート・ルームの初年度の活動に関する考察
学生相談研究 23 233-242

山下啓司（2010）素人集団による学生支援 大学と学生 第 84 号 44-49